岡山県学校給食会会報
県学給だより

令和４年度における
学校給食用物資の動向予測について

令和３年10月までに、新型コロナウイルスに対するワクチンの接種が進み、緊急事態宣言も解かれ、東京オリンピックの成功も追い風となり、経済回復に向けての期待感が高まったが、新たな変異株（オミクロン）が発生し、令和４年、年明け早々にはオミクロン感染症の影響により、急激に感染者が増える状況となり、今後の経済回復の先行きが見えない状況となっている。

このような状況の中、昨年秋口からは食品の値上げ報道が相次ぎ、今年１月から大手メーカーの値上げも報道されている状況である。

考えられる値上げの要因としては、

◎原油価格の高騰　→　物流費・工場光熱費・包装材料等
◎ロックダウンの解除　→　海上コンテナ不足に伴うコンテナ確保と海上輸送費の高騰
◎為替相場(円安)　→　輸入品全て
◎畜産飼料の高騰　→　食肉・生乳・乳製品・卵類等
◎自国消費の推進　→　輸入量の減・輸出関税の引き上げ等
◎その他　→　異常気象（温暖化で生産量の減少）・他国消費量の増（インド・中国等）

日本における国内自給率は40％を下回り、加工用原材料も輸入品に頼っており、値下がり要素が見つからない状況である。また、安価を保つため各企業の努力もあったが、今回の値上げについては、企業努力（経費節減等）だけでは対処できない状況であると考えられる。

また、年度替わりには更に値上がることもあるのではないか？との懸念も……

このような状況の下、令和４年度の価格動向を予測するのは極めて困難なことではあるが、本県学校給食会が収集した範囲内で情報提供する。

令和４年度の学校給食費の見直し材料として役立てていただければ幸いです。

１　基本物資
（パン・めん・精米・米飯・米加工品等）

⑴　学校給食用小麦粉

輸入小麦の政府売渡価格は、価格変動制（年２回、４月期・10月期）を導入している。

売渡価格は、改定ルールに基づき、輸入小麦の直近６か月間の平均買付価格を基に算定している。（穀物の国際相場、海上運賃、為替等の動向を反映した買付価格）

小麦相場について、昨年10月期の政府売渡価格は、高騰したトウモロコシに代替する飼料用に令和３年初来の米国産、カナダ産小麦に対する中国の旺盛な買い付け、更に６月以降、米国北部及びカナダ南部の日本向け小麦粉産地において、高温乾燥による作柄の悪化、太平洋エリアで輸送需要の回復による海上運賃の大幅上昇などにより前期と比べ平均価格は19.0％上昇した。

令和４年４月期の政府売渡価格は、３月上旬に決定される。いまだオミクロン株や原油高の影響で世界経済は不安定な状況のなか、今後の海上運賃、為替動向、小麦の作柄、産地の天候要因などによって変化するとみられるが、現状では上昇傾向が続くと思われる。

国内産麦（中力粉）価格は、昨年９月に行われ

No.250
令和４年２月10日
編集発行

公益財団法人　岡山県学校給食会
〒702-8026　岡山市南区浦安本町 59 番地の４
TEL 086-263-6465(代)
URL：http://www.ogk.or.jp/

た令和４年産民間流通麦入札において、作柄は主要産地である北海道を中心に豊作傾向であるが、堅調な国内需要や輸入麦の価格改定と連動した事後調整により決定されるため、現状では価格上昇が見込まれる。

これに基づき、３月に県内の製粉工場３社による指名競争入札を実施し、学校給食用小麦粉価格（強力粉・中力粉）を決定することとなる。

ア．学校給食用米粉パン

パンは県産米粉20%を配合した「米粉パン（岡山っ子こめこパン）」を供給している。

原材料である強力粉、砂糖、ショートニング、脱脂粉乳は値上げ、米粉は据え置き相当の見込みである。

原材料、加工賃を合わせたパン価格は、原材料の高騰により値上げが予測される。

イ．学校給食用米粉めん、うどん

ソフトスパゲティ式めん、中華めんは県産米粉を20%配合した「米粉めん」を供給している。

原材料（強力粉、米粉）、加工賃（グルテンを含む）を合わせた米粉めん価格は、原材料の高騰により値上げが予測される。

うどん価格は、値上げが予測される。

⑵　学校給食用米穀等

岡山県の令和３年産水稲の作柄（農政局12月９日公表）は、９～10月にかけて雨量不足の影響により、米の胴割れによる品質低下が多く見られたが、収穫量は作況指数99（南部100、中北部99）の「平年並み」となった。

ア．学校給食用精米

３年産新米価格（03年11・12月～）は、予想収穫量は平年並みが見込まれているが、コロナ禍の影響による中食・外食産業の低迷に伴い、いまだ市場在庫が過剰にあることに加えて、東日本の米の主要産地が豊作となっているため、安価な米が全国に流通していることから値下げとなった。

新年度価格（04年４月～）は、２月末頃に米穀取扱業者、精米工場と価格交渉して決定するが、昨年同時期と比べ、若干の値下がり見込みである。

イ．委託炊飯（米飯）

２年産米に続き、３年産新米価格は値下げとなったため、年度当初と比べて新米炊飯価格は、値下げが予測される。

加工賃と合わせた炊飯価格は、光熱費の値上げがあるものの若干の値下げが予測される。

ウ．米加工食品

アルファ化米は、昨年に続きコロナの影響による全国的な新米価格の値下がりにより、多少の値下げが予想される。一方でアルファ化赤飯は、もち米相場は変わっておらず、製造・物流コストの上昇により多少の値上の見込みである。

エ．強化精麦・強化米

強化精麦（強化白麦、切断無圧ペン精麦）価格は、据え置きの見込みである。

強化米価格は、据え置きの見込みである。

2　学校給食用牛乳

乳価については、令和３年度並みの推移と見込まれるが、資材値上げ、物流コストの増加により、供給価格の値上りが予想される。岡山県の令和４年度の牛乳価格は、１月に各供給乳業者から見積を徴収し、３月に補助額が決定され、県内平均供給価格が算定される。

3　常温物資

⑴　食用油

原料大豆は、原料産地（アメリカ・ブラジル）の天候不順や世界的な脱炭素化の動きが加速する中で、バイオ燃料需要が増加したことなどを背景にこの１年で大きく値上がりした。さらに中国が原料の大豆の輸入を増やしていることも値上げの原因とされている。引き続き価格の高止まりが予想される。

こめ油は、原料である米糠が、米の消費量減少に伴い、生産量の減少が続いている。近年国産原料の米糠の確保が厳しくなっているため、外国産原料の輸入を行っているが、輸入コストの上昇が続き、高値で取引きされている。このような状況で、製品価格は高値安定、もしくは値上りが予想される。

⑵　砂糖

原料粗糖の輸入コストの高騰で昨年だけでも大手製糖メーカーが３度の値上げを発表した。合わせて原料粗糖の最大生産国のブラジルが天候不順に見舞われ、生産量も減少していることにより、今後も昨年同様に高値安定、もしくは、さらなる値上げもあると予想される。

⑶　乳製品（バター、チーズ）

バターは原料である油脂の国際価格が、原料産地での天候不順の他、世界的な需要拡大により高騰し、昨年市場価格は値上げとなった。チーズも輸入原料の高騰により高値安定が続いており、価格については値上げが予想される。

⑷　缶詰

ア．みかん缶（国産）

令和３年度の温州みかんの生産量は前年比の98%と予想される。令和３年度産のみかんは大玉傾向で２～３割はLサイズになる予定。近年はみかんの園地が減少し、品不足が続いている状況で、青果の需要が増え、市場でも高価格での取引きが

続いているため、加工用原料は減少傾向にある。青果価格次第だが、昨年並みの原料は確保できると予想されるが、副資材の高騰が拡大しており、空缶・砂糖・添加物はすでに値上げになっているため製品価格は値上げとなる可能性が高い。

イ．たけのこ（岡山県真備産・国産）

真備産たけのこは、令和４年は表年にあたる。今のところ天候も例年に比べて安定しているため特に影響はないと予想されるが、年々収穫農家の高齢化により収穫量は減少しているため、価格は値上げ、または横ばいでの推移が予想される。

また、九州産たけのこについては、令和４年は裏年だが、慢性的な人手不足で収穫量、生産量ともに頭打ちになっているため、表年も裏年も価格的にはあまり変わりない状況。人件費、輸送費など全てが値上がりしており、製品価格は値上がり、もしくは、横ばいでの推移が予想される。

ウ．パイン缶（タイ産）

タイの令和３年度産のパインは昨年同様コロナの影響による人手不足の上、工場内もディスタンスを取らないといけない状況で、多くの工場が通常生産能力の約50%となった。原料は昨年の10%増と解消されたものの、貨物輸送費や空缶代が上昇となっているため販売価格は値上がりが予想される

エ．うずら（国産）

昨年から飼料価格が高止まりで、さらに資材価格の高騰で農家が増産しても収益が上がらない状況が続いており、減産傾向にある。加えて原油高による輸送コストの高騰、人手不足による人件費の上昇など価格維持に対し、限界を超えた状態となっており、このままの状態が続くようであれば製品価格は値上がりが予想される。

オ．ツナ缶

令和３年１月～ 12月の焼津港での加工用のマグロ水揚げ実績は、10,240トン（令和２年１月～12月13,533トン）と昨年の76%に漁獲量は減少した。さらに、大型サイズの漁獲割合が減少したこともあり、中小型魚も値上がることになり、価格はキロあたり202円（昨年の105%）と値上がりした。加工用の中小型魚の割合が低いため、原料価格は高値で推移している。昨年同様に製造工場の人手不足もあり、一次処理を行った原料を輸入する割合が増えており、その分原料価格が上がるため製品価格も高止まりしている。さらに為替の影響、ガソリン、資材の値上がり等で製品価格は値上げが予想される。

⑸　乾物

ア．岡山県産乾椎茸

主要産地である岡山県北部は昨年末から雪が降り山間部では気温が低く積雪になった。一昨年は暖冬の影響により原木しいたけの発生条件である「低温刺激」が少なくなり生産量は減少したが、令和３年産は低温刺激と除雪による水分補給がしっかりと有ることから良好な状況が続いている。さらに近年は新規の生産者も加わり、集荷量は増加している。このような状況により価格については横ばいと予想される。

イ．生わかめ

新物わかめの生産は、三陸、岩手・宮城両県とも11月末頃まで海水温の高い状況から生育遅れの懸念があったが、12月以降寒波の到来により、一気に海水温が下がり、順調な成育状況にある。

また、鳴門産についても同様に順調な生育が続いているため、このまま気象が安定すれば価格は横ばいと予想される。

ウ．海苔

国産海苔の生産は令和２年度全国生産量69億8000万枚に対して、令和３年度は64億5500万枚と前年比92.5%に減産した。現在国内の年間総需要量は約80億枚といわれており、不足分は繰越在庫と韓国、中国からの輸入海苔が約15億～20億枚輸入されて国内需要に対応している。昨年に引き続き、コロナ禍での巣ごもり需要の高まりにより、不足気味の状況で新海苔の生産を迎えた。新海苔は１月現在で、全国生産数は約21億5000万枚と前年同期生産数23億枚を下回っているため、既に平均価格が上昇している。例年３～４月まで収穫が続くが、降雨不足による栄養塩不足から色落ち現象が始まっている地区があり、今後適度な降雨がなければ、一気に色落ちが拡がることが懸念され、生産終了が早まる可能性がある。このような状況から今後適度な降雨も無く海苔の生産に適した気象状況にならなければ、全国的に減産となり、価格は値上がりが予想される。

エ．煮干

令和３年度の瀬戸内海地区における生産は、香川県伊吹島・観音寺地区では中荒羽～大羽サイズは良質の物が減漁となった。中小羽～中羽サイズはあぶら物で魚質が悪く、不漁のまま昨年より１ヶ月早い９月初旬で漁を終了した。その後、広島・愛媛・山口での漁は継続されたが、魚質は良くならず、10月初旬頃から中小羽～中羽サイズでやや良質な物が獲れたが漁獲量は少なく、大半はあぶら物で良質品が少ない年となったため、良質品は前年より若干の高値となった。価格は値上がりが予想される。

４　畜産物

⑴　学校給食用輸入牛肉（オーストラリア産）

令和３年の豪州の牛肥育頭数は、生産者において牛の成長を待たず相場が高いうちに売りに出そうとする動きが見られ、減少傾向で推移した。このため、牛肉生産量は減少し、牛肉価格も高値で推移した。さらに、新型コロナの感染拡大の影響で、アメリカ・中国を中心とする輸送コンテナ・輸送船不足は深刻で、国内でも「ミートショック」と呼ばれるほどの品薄状態が続いている。価格の安いウルグアイ・ヨーロッパなどからの輸入で全体価格を押し下げようとしたが、豪州・アメリカの牛肉不足の中、需要は中国を中心に世界中で取り合いの状況の上、輸送問題も重なり、令和４年度の価格は下がらず、円安の影響もあり、更なる高騰が予想される。

⑵　国内産牛肉

令和３年の年末は、新型コロナの感染状況がいったん落着きを見せ、地方の小売店や飲食店では、帰省や旅行者が増えたことで、和牛を含め、牛肉全体の売行きは堅調であった。生産面では、長期化するコロナ禍で、牛乳・乳製品の消費が進まず、乳用種の頭数は減少傾向である。また、輸入牛の品薄状態による国産牛への引き合いもあり、相場は高値を維持していた。しかし、本年に入り、オミクロン株の感染急拡大によって、「まん延防止等重点措置」の適応などで、一転して消費は不透明な状況となった。今後、外食需要が減少すると思われるが、家庭消費は昨年並みの消費を維持する状況が予測されるため、価格は、高値安定が予想される。

⑶　豚　肉

輸入豚肉は、新型コロナの影響が続く中、コンテナ不足によるチルド豚肉の入船の遅れが発生し、賞味期限が残っておらず、緊急に凍結されているが行き場を失っており、価格は下がっている状況。また、国産豚肉は、令和３年末からの急激な気温低下による豚の増体不良のため出荷頭数が減少することが懸念され、輸入豚肉の不安定な入荷状況もあり、相場は堅調な展開が予測され、価格は、強含みが予想される。

⑷　鶏　肉

令和３年の国産鶏の生産状況は、各産地の生産意欲は高く、ブロイラー処理羽数は増加したが、コロナ禍の長期化による、外国人技能実習生が入国できないことによる人手不足や、飼料価格・物流費の高騰などで生産コストは上昇し、相場は高値で推移した。また、輸入鶏肉についても、タイやブラジルの海外大手工場で従業員のクラスター感染が発生して稼働停止となり、製造が滞ったことから、輸入量が減少し、品不足による冷凍加工メーカーの製品値上げにつながった。今後、鳥インフルエンザの広がりの懸念もあり、予断を許さない状況は続くと思われ、価格は高値安定が予想される。

⑸　鶏　卵

令和３年度当初は、２年度からの鳥インフルエンザの影響による羽数の減少とコロナ禍により外食需要は落ち込んだが、巣ごもり需要でパック卵や冷凍食品を中心とした加工食品が好調であったため、鶏卵相場は上昇した。鶏卵生産環境は、物流コスト高で飼料価格の上昇は続くと思われるが、飼料用米を活用した国産飼料への転換推進で生産原価の上昇を抑える動きが見られる。しかし、鶏インフルエンザや新型コロナの動向は不透明であり、価格は横ばい、もしくは強含みでの推移が予想される。

5　冷凍物資

⑴　水産物

ア．キハダマグロ

日本国内のマグロの主な水揚港である、静岡県焼津港の令和３年巻き網漁のキハダマグロ漁獲量は、新型コロナの影響により減少していた令和２年の約２万６千トンと比べ微増の約２万７千トンとなった。また、缶詰若しくは加熱用原料については、コロナ禍の影響で海外から輸入される原料が少ないこと、今後の先行き不安のあおりを受け、国内製造メーカーが日本で水揚げされる原料買付の動きを活発化させたため、前年と比べ高値で推移する結果となり、令和２年の平均相場221円/kgと比べ令和３年は230円/kgと値上がった。輸入原料についても前述のとおり輸入数量が減少しており、価格は上昇している。

このことから、令和４年度価格は、今後の新型コロナの状況及び漁獲量にもよるが、横ばい若しくは強含みでの推移が予想される。

イ．紫いか・するめいか

北太平洋で漁獲される紫いか漁は、三陸沿岸で行われる冬漁（１～３月）と三陸から遥か離れた沖で行う春夏漁（６～８月）の２回に分かれており、令和３年の冬漁は、前年と同様に漁獲がなく、春夏漁は主産地である八戸港の水揚げで、前年の約４千900トンに比べ49％減の約３千270トンとなった。減少した要因は、１航海目の水揚げ後、２航海目に出ず、日本海でのスルメイカ漁に切り替える船が多かったためであり、４年ぶりに４千トンを下回り、価格も高騰した。このことから令和４年の価格についても高値で推移されると予想される。

令和３年のするめいかの漁獲量は、７年ぶりに漁獲量が増加した令和２年の約４万６千トンを超

える結果となった。しかしながら、近年最も漁獲量が多かった平成23年の24万２千トンに比べると、約５分の１となっており、今後も低調な水揚げで推移する見込みである。このことから、令和４年の価格についても当面は高値での推移が予想される。

ウ．むきえび

インド産天然エビの状況は、現地のコロナ禍による工員減少やロックダウンが影響し、生産力が低下しており、工員の給料上昇や工場を稼働するために必要な燃料費や海上運賃の値上げが発生していることから、原料価格が上昇している。今後の新型コロナの状況にもよるが、令和４年の価格については強含みでの推移が予想される。

エ．いわし

令和３年の北海道巻網マイワシ漁は、６月28日～10月31日の間に行われ、漁獲量は前年の約24万７千トンに比べ約５％減の約23万５千トンとなり、３年連続で20万トンを超えた結果となった。魚体サイズは小型中心、価格もほぼ前年と同様であり、飼料や肥料となる原料が約９割を占めた。令和４年の価格については、今後の漁獲量に左右されるが、当面は横ばいでの推移が予想される。

オ．さんま

令和３年の漁獲量は、11月末時点で過去最低を記録した令和２年の約２万４千トンに比べ34％減の約１万７千900トンとなり、大不漁となった。不漁の原因としては暖かな黒潮が北海道にまで及び、その結果海水温が上昇したことが影響したと考えられる。最近では北海道よりさらに北の海域でも漁獲されるようになり、高騰している燃料代及び人件費の上昇が価格に影響している。このことから令和４年価格については高値で推移し、品薄の状況が当面続くと予想される。

カ．シロサケ（秋サケ）

令和３年の北海道の漁獲量は、11月末時点で前年並みの約４万８千トン、岩手県では前年の約185トンに比べ24％減の約150トンとなり、漁獲量の減少が深刻化している。平成27年まで年間約10万トンの漁獲量があったがそれ以降は減少したまま推移しており10万トンを超える年はなかった。令和３年の価格は不漁が続いたことが影響し、北海道では前年比20％高、岩手県では54％高となり、高値で推移した。令和４年の価格についても引き続き高値での推移が予想される。

キ．くじら（イワシ鯨）

日本は国際捕鯨委員会から脱退し、令和元年７月から南氷洋・北西太平洋での調査捕鯨を止め、領海及び排他的経済水域内で商業捕鯨を開始した。商業捕鯨により捕獲される鯨の大部分はニタリ鯨であり、現在給食用として供給しているイワシ鯨の捕獲数量は少数となっている。令和４年の学校給食向けの供給は、以前行っていた調査捕鯨の副産物で得たイワシ鯨の在庫があるため価格もしばらく横ばいでの推移が予想される。しかし、その在庫も残り少なくなってきており、令和５年からは商業捕鯨で捕鯨されたニタリ鯨での供給となり、鯨の種類及び価格等にも影響があると予想される。

⑵　農産物

ア．コーンカーネル（北海道産）

令和３年の北海道の美瑛町では高温、干ばつが影響し、大減産となった。一方、北海道東南部、主に十勝地方では天候の影響はさほどなく、平年並みの収穫量となった。その結果、豊作だった昨年の繰り越し在庫を持つ工場もあるが、品薄となっている工場もあることから２分化している状況であり、令和４年の価格については、新物の出荷が始まる９月までは強含みでの推移が予想される。

イ．里芋（九州産）

主要産地である宮崎県の作付面積は、令和３年は令和２年と比べほとんど変わりがなかった。しかし、収穫量の少なかった畑の生産者が本来確保しておく種芋を売りに出してしまう事例があることから種芋が不足し、加えて「うどんこ病」や「軟腐病」などの疫病の発生、また、収量の減少や価格の値崩れによる里芋の生産者離れが増えている状況にある。収穫量及び収穫された里芋のサイズは各産地によってバラつきがあるが、一部の地域では歩留まりの関係上、乱切りに適した大きいサイズの入荷が多く、例年丸形を中心に製造する工場が、乱切りへ製造をシフトしたところもあった。また、価格については原油価格や光熱費などの経費が上昇しており、値上げ傾向となってきている。令和４年の価格についてはしばらくの間は横ばい、新物になると値上がりが予想される。

ウ．ほうれん草（九州産）

令和３年の年内に収穫された九州産ほうれん草の作柄は、９月に雨天が多く、植え付けが減少、加えて10月には干ばつが発生し、播種しても発芽率が悪く生育が遅れた。11月は降水量こそ増えてきたが、気温が平年より低く生育がさらに遅れた地域もあったため、例年より製造開始時期が遅れた。令和４年価格については、これから本格的な収穫が行われる地域もあることから今後の状況にもよるが、原油価格の高騰を起因とする農業資材や包材など製造コスト上昇が影響し、当面高値での推移が予想される。

エ．冷凍みかん（国産）

令和３年度産温州みかんは、九州では「表年」和歌山県や静岡県では「裏年」にあたり、全体の収穫量は前年並みからやや少ない結果となる見込み。品質としては降雨量が多く、薬を散布しても流される、あるいは散布自体ができなかった地域もあったことから、キズが多く見られており、青果向け出荷量は減少した。価格についてはリンゴの収穫量が全国的に悪いことから、みかんの引き合いが強くなり、産地によって前年と比べ高値で推移しているところもある。九州産冷凍みかん向け原料は、出荷量、糖度及び酸味共に平年並みであり、大玉傾向である。このことから、令和４年価格は前年価格とほぼ横ばいでの推移が予想される。

6　保護者負担の学校給食費

令和４年度の学校給食費は、令和３年度当初と比較して、自校炊飯では2.5％、委託炊飯では3.0％程度の増額を見込む必要があると予想される。

表１　学校給食費の平均月額

区分 ＼ 年度		28 年度		30 年度		3 年度	
		平均月額(円)	対前年上昇率(%)	平均月額(円)	対前年上昇率(%)	平均月額(円)	上昇率(%)
全国平均	小	4,323	0.5	4,343	0.5	—	—
	中	4,929	0.2	4,941	0.2	—	—
岡山県平均	小	4,691	△0.5	4,775	1.8	4,819	0.9
	中	5,285	△0.2	5,371	1.6	5,557	3.5

表２　令和３年度１食当たりの平均価格

区　分	小　学　校	中　学　校
主食(米飯・パン・めん)	46 円 98 銭	54 円 89 銭
牛　乳	55 円 04 銭	55 円 04 銭
副　食	171 円 22 銭	213 円 49 銭
合　計	273 円 24 銭	323 円 42 銭

(注)岡山県教育委員会調査の一食あたりの平均単価をもととした岡山県学校給食会の推計。

表３　学校給食費の内訳別上昇見込率

区　分	小学校			中学校		
	令和３年度構成比(%)	令和４年度見込比率(%)		令和３年度構成比(%)	令和４年度見込比率(%)	
		自校炊飯	委託炊飯		自校炊飯	委託炊飯
主食(米飯・パン・めん)	17.2%	95.3	98.6	17.0%	95.3	98.6
牛　乳	20.1%	100.0	100.0	17.0%	100.0	100.0
副　食	62.7%	105.0	105.0	66.0%	105.0	105.0
合　計	100.0%	102.3	102.8	100.0%	102.5	103.0

(注)　1.岡山県学校給食会で独自に推計したものである。
2.主食の週当たりの実施回数は、米飯 3.00回　パン 1.31回　めん 0.69回　と推定した。
3.牛乳は若干の値上げが予想されるが現時点では100%とした。
4.副食は、それぞれ原料等の動向により値上げ幅は異なるが、現時点での単純平均変動を推計したものである。